

変化に適応し、新しい価値を生み出すことが ワクワクするほど楽しい

【新宿発】週刊BCNの「視点」欄に寄稿いただいている渡邊さんのキャリアは、本文や略歴欄に記した以外にもいろいろある。政府や自治体、民間部門などからも引く手あまたなのだ。お話をうかがっていると、組織やプロジェクトの立ち上げメンバーとして参画し、事業が軌道に乗るとまた別のステージに移るといった形が多いようだ。そのスタンスは、どこかカッコいい。「変化が大好き」と自らおっしゃるとおり、その視点は常に時代の少し先に置かれているのだ。

(本紙主幹・奥田喜久男)

コロナ禍の出現により 価値観の多様化が加速していく

奥田 渡邊さんは、Psychic VR LabでVR（バーチャルリアリティ）やMR（ミックスリアリティ）の開発に携わる一方、事業構想大学院大学で教鞭をとられるなど、多彩な活動をされています。そこに共通してあるのは「未来」という概念だと思うのですが、このコロナ禍で今後世の中はどう変わっていくのでしょうか。

渡邊 ひとつ挙げられるのは「みんなが同じではない」と気づいたことですね。言い換えれば、価値観の多様化がコロナ禍によって進んだといえます。
奥田 でも、仮にコロナ禍がなくても、現代社会では価値観の多様化は進んでいるのではないのでしょうか。

渡邊 おっしゃる通りですね。ただ、この状況により5年から10年、そのスピードは増したといえるでしょう。たとえば、コロナ禍により多くの人が集まって多数決で物事を決める機会が少なくなっています。そのため、これまでは多数決に追随していた人も、これからは自分自身で考えて意思

決定する必要に迫られます。つまり、多数決の世界から、小さなコミュニティで同じ価値観を持った人が集まって物事を進めていく世界への移行、価値の分散化が広がると思われます。

奥田 それは、どんなことから実感されましたか。
渡邊 このPsychic VR Labは2016年に立ち上げ



PROFILE 1968年、千葉県木更津市生まれ。群馬大学工学部卒業後、電通国際情報サービスでネットバンキング、オンライントレーディングシステムの構築に多数携わる。2006年、同社執行役員就任。経営企画室長を経て、11年、オープンイノベーション研究所を設立し所長に就任。14年、同社退職。15年、事業構想大学院大学教授。16年、Psychic VR Lab 取締役COOに就任。地方創生音楽プロジェクトone+nation Founderなども務める。

構成／小林茂樹
text by Shigeki Kobayashi

撮影／松嶋優子
photo by Yuko Matsushima

2020.10.23 / 東京都新宿区のPsychic VR Labにて

た会社ですが、設立当初、VRは見向きもされないテクノロジーで、私たちも2030年頃の普及を目指して開発を進めていました。盛り上がるのは、まだ先のことだとみんなが考えていたわけです。だから多くの方は気にとめてくれなかった。ところが、コロナ禍によって多くの人が集まる展示会などがリアル空間で開催できなくなると、VRを使ってみたいという問い合わせが殺到しました。

これは、背後に“崖”ができてしまったことにより、これまで、どちらかというVRに否定的だった個人が、VRでできることとできないことを検討し、「とりあえず、これを使ってやれるところまでやってみよう」というところまで進んだといえると思います。

奥田 大多数の意見によって動くのではなく、自ら考える必要に迫られたと。

渡邊 そうですね。コロナ禍をきっかけに、ある程度自分で考えて意思決定していかないと、世の中の動きに置いていかれるという感覚も広まったのではないのでしょうか。社の意思決定ではないんですが、という枕詞も多く聞かれました。

同じ価値観を持つ人が集まれば 目の前の障壁を突き崩せる

奥田 「多数決」と「小さなコミュニティ」ということについて、もう少し深掘りしていただけますか。

渡邊 日中戦争下の1940年、日本は開催が決まっていた東京五輪を辞退しましたが、当時の力は国家を主体とした武力であり、それが国民の価値観でもありました。そして、戦後の1964年に東京五輪が開催されましたが、高度経済成長の時代、力は資本(お金)に変わり、その主体は国から企業に移りました。ここまでは「多数決」の時代といっているでしょう。

ところが、今回延期された2020年東京五輪の時代における価値観は「共感」と私は考えています。資本力とは異なる価値観を共有した人たちが集まり、行動を起こしていく。まさに個人や小さなコミュニティがその主体となっていくわけです。主体が、国、企業、コミュニティとどんどん小さくなることで、多数決から価値の分散化への移行が起こっているというイメージですね。

奥田 そうした動きも新型コロナの蔓延で加速した、と。

渡邊 そうですね。VRの例のようにテクノロジーの進化も加速するでしょうし、SDGsなどの展開も一気に加速していくことでしょう。



リトルジャマープロ

今から15年ほど前にバンダイから発売されたジャズミュージシャンのロボット。特別な仕様のカセットにはロボットの動作データとMIDIデータが収められており、クオリティの高い音質とリアルなミュージシャンの動きを再現する。残念ながら現在は販売されていないが、モノづくりに対するこだわりと執念が伝わってくると渡邊さんは話してくれた。

奥田 価値観を共有した人が集まる小さなコミュニティには、どんなメリットがあるのでしょうか。

渡邊 Psychic VR Labを立ち上げたとき、見向きもされなかったとお話しましたが、実際、資金調達にあたって、証券会社からは相手にされなかったんです。このテクノロジーの可能性を信じた人だけが集まり、資金の出し手も私たちの話を信じてくれた個人投資家だけでした。でも、こうした同じ価値観を持つ人で構成されたコミュニティは、その相乗効果によって物事がどんどん前に進みます。結果はどうあれ、目の前の障壁を突き崩す力を持つことは間違いないですね。

奥田 いま起こっている変化が加速することで、それがプラスに作用する人とマイナスに作用する人がいるように思いますが、その点についてはどうお考えですか。

渡邊 私自身にとっては、プラスに作用するものだと思っています。それはなぜかという、変化そのものが大好きであり、変化に対して自分を適応させたり、その際に新しい価値を生むことが楽しくワクワクしたりするからです。そうしたタイプの人にとってはハッピーだと思いますね。

それに対して、いまの地位や生活を崩したくないと守りに入っているタイプの人は、変化に対応しないことで、いま持っているものの価値を失うこととなります。ですから、この変化は二極化をもたらすことになるでしょう。

奥田 そうした変化を好む渡邊さんの気質は、もって生まれたものですか。

渡邊 いいえ、後天的なものですね。もともとはすごく引っ込み思案な性格でした。大学は理系でバイオテクノロジーを学んだのですが、新卒で入ったSier(電通国際情報サービス)で営業の仕事をとて自由にやらせてもらい、そこで学んだことがいまにつながっているのだと思います。

奥田 仕事を通じて、チャレンジングなタイプに

変わっていったわけですね。

渡邊 でも、学生時代に「いぶし銀」タイプだと言われたことが二度もあるんですよ。

奥田 いぶし銀って、渋くてかっこいいじゃないですか。それは誰に言われたのですか。

渡邊 一回目は占い師で、二回目はお世話になっていたある企業の社長です。おまえは、金(トップ)ではないからそれを支える側に回るべきだと。新しいことにどんどん取り組みたいのにそんなことをいわれて、当時はちょっとショックでしたね。

奥田 なるほど。

渡邊 でも、会社に入ってから、その意味がようやくわかりました。組織には、突き破る人とそれをきちんと積み上げて実にしていく人の両方が必要だと認識したのです。それからは、自分の役割というものを意識するようになりました。

(つづく)

BCNは「ものづくりの環」を支え
育むメディア企業です



——「ものづくりの環」の詩——

ものを使う人がいます
ものを売る人がいます
ものをつくる人がいます

いつの時代も私たちは生活の心地よさを求めます
その意(おもい)が新しいものを生みます

使う人、売る人、つくる人——
私たちは「ものづくりの環」のなかで
すべての人の心が豊かになることを願っています

株式会社 BCN

<http://www.bcn.co.jp/>

※この記事は、BCN+Rの「千人回峰(対談連載)」で公開中です。
<https://www.bcnretail.com/hitoarite/>